

本日、高校3年生106名が巣立ちました。3年間のまとめの1年間がコロナ禍にあって、納得できない日々を送ったはずですが、しかし、生徒たちは進路決定に向けて各々真摯に取り組みました。よく頑張りましたね。「卒業、おめでとう」。(以下は、式辞全文)



## 謙虚に、利他の想いを持って…

冬の寒さを後に三寒四温を繰り返し、いつもの春がやってきました。今日のこのよき日、卒業証書授与式を挙行できますことは、誠に喜ばしい限りでございます。

卒業生のみなさん、卒業、おめでとうございます。

保護者のみなさま、高いところからではございますが、ご息女のご卒業、誠にありがとうございます。また、この3年間、本校の教育活動にご理解とご支援を賜りましたことに深く感謝申し上げます。そして、本日の卒業式の挙行にあたり、ご多用の中をご臨席いただきましたご来賓のみなさまに、心からお礼申し上げます。

卒業生のみなさん、高校生活3年間は、「鈴峯」から「協創」へという本校の変革の時にあたり、多くの戸惑いがあったに違いありません。校舎の移転、旧校舎の解体、女子校から共学校となったことなどがあるでしょう。とりわけ、この一年間は、コロナ禍に翻弄されました。一斉の学校休業、部活動の停止、行事の縮小など、これまでに経験したことのない、さまざまな制限が否応なしに振りかぶり、思い描いていた高校3年生の生活は不満足なものにならざるを得ませんでした。しかし、一人過ごすことになった時間は、進路選択に向けて改めて自分自身を見つめる機会を与えてくれたのではないのでしょうか。

さらに、8月、屈託のない笑顔と包み込むような優しさであふれる石井日菜乃さんとの別れがありました。哀しく、辛かった。でも、みなさんの心の隅で日菜乃さんは微笑んでくれているはずですが。そして、今日、この会場のどこかでみなさんと共に高校生活の最後を迎えているはずですが。

さて、今日の多様性の時代、不確実性の高い時代、さらには、「人生100年」と言われる時代において、みなさんにはより良い社会と幸福な人生の創り手となるような生き方が求められているように思います。

そのためには、どんな生き方が望まれるのでしょうか。

岐路に立つみなさんに、自戒を込めながら託したいことがあります。それは、『人間の格』を記した芳村思風氏の考えでもありますが、「本物の人間」になるということです。どういうことか。その手順は、何かにつけて自分は不完全であることの自覚から、いつでも謙虚であることを忘れないことが最初です。次に、謙虚であるという姿勢は、自分は何を知っていて何を知らないのか、何ができて何ができないのかを見通すことにつながります。そのことが、今以上に、愚直に、もっと知りたい、もっと高みを目指して生きていきたいということに結び付きます。やがて、その姿が他者に認められ、自分を必要とする人が現れるでしょう。そして、人に必要とされる人間になり、人の役に立つ人間になることを尊しとすることになります。本物の人間になるということは、謙虚であること、今に満足せず高みを目指すこと、利他の想いを持つことなのです。変化の著しいこの社会だからこそ、求められる生き方だと信じて止みません。

このことは、建学の精神「報恩感謝・実践」そのものであるとも言えます。社会の荒波にのまれそうになるとき、何かがかきつけて心折れそうになるとき、驕り高ぶって迷走しそうになるとき、「報恩感謝・実践」を唱えてみてください。真(まこと)なる軌道に改まるはずですが。

さあ、いよいよ旅立ちのときを迎えます。最後の「鈴峯の乙女」として、鍛え上げたパワフルなメンタルと、培った「報恩感謝・実践」の教え、「未来協(かな)えて創りゆく」協創の想いを糧に、数年後、十数年後、数十年後と、いつまでも輝くみなさんであり続けていることを心から願っています。

結びにあたり、卒業生並びにご参列いただいたみなさまのご健勝を祈念して式辞といたします。